

『蒼の王子と誓いの愛翼』

著：真崎ひかる

ill：明神 翼

「では、こちらへ。離宮に案内しよう」

「よろしく願い申し上げます」

頭を下げた翠蓮が両腕で抱えた銀の鳥籠は、その中央に卵の放った光と同じ蒼い天鷲絨が敷かれて卵が鎮座している。

緊張のあまり手が震えそうになっていることを感づかれないよう、ギュッと奥歯を噛んで真っ直ぐに前を見据えた。

翠蓮の数歩前を歩くのは、案内役の黒烏と名乗った騎士だ。長剣を携え、堂々と王宮内を歩く姿は凛々しい。

骨格が頑健とは言い難く、身長も伸び悩み……体格に恵まれなかった翠蓮は、騎士の役に就くことを諦めている。

でも、子供の頃は王宮での行事の際にずらりと並ぶ騎士団に目を輝かせ、いつかあの中の一員となりたいなどと憧れたものだ。

それも、自分の置かれた状況を解する頃には、適性があったとしても不可能な望みであり……不適合でよかったのかもしれないと、今となっては思う。

仕方がないと自分に言い聞かせ、諦めることには慣れているが……。

「今の時間だと、このあたりに……」

真っ直ぐに背を伸ばして大股で歩いていた黒烏は、離宮の角を曲がって庭の奥を覗き込む。

その後に続いて角を曲がりかけた翠蓮を、黒烏の腕が遮った。

「待て」

え？ と首を捻ったと同時に、キラリと光るなにかが目の前を横切った。咄嗟に両手で持っていた鳥籠を胸に抱き込み、背中を屈める。

そうして防御姿勢を取って身構えたけれど、特になにかが起こるようでもない。

黒烏と自分の前を横切って地面に突き刺さったものは、なんだろう。その正体を確かめなければ、完全に気を抜くことはできない。

翠蓮は黒烏の背後から顔を覗かせると、恐る恐る地面に視線を落とした。

「ッ！」

見慣れないそれが、銀色に輝く細身の剣だと理解したと同時に肩を強張らせる。

ここは、堅牢な門と警備に護られた城内だ。こんな物騒なものが不意に飛んで来るなど、あり得ないはずで……。

どうなっているのだと、翠蓮の前に立つ黒烏に尋ねようとしたけれど、声を出していいものか

どうかわからない。

今、翠蓮がなにより護らなければならないものは……腕に抱えた銀色の鳥籠、そこにある大切な卵だ。

「午後には、抱卵役を案内するとお伝えしていたはずですが……ずいぶんな歓迎ですね、蒼鷺様」

身構える様子もなく淡々とした調子でそう口にした黒烏に、翠蓮は言葉もなく目を瞞る。

蒼鷺様が、レイピアを投げつけて来たということか？

「おまえが、気配を殺して近づいて来るからだ。先に声をかけろ」

黒烏に答えた青年の声は、低く落ち着いたもので意外にも耳に心地いい。姿は見えないが、剣呑な空気は感じなかった。

でも、だからこそ、レイピアという武器を投げた状況との落差が恐ろしい。

「それは、申し訳ございませんでした。ですが、周りがすべて敵というわけではないのですから、物騒な物を飛ばすのは控えてください」

地面に斜めに突き刺さっているレイピアを抜いた黒烏が、少し呆れたような調子でそう言いながら蒼鷺様と呼びかけた相手に柄の部分に向ける。

翠蓮を振り向き、「こちらへ」と手招きされて小さくうなずいた。

その角を曲がったところに立っているのが、蒼鷺様。

翠蓮が選ばれた青い光を放つ卵の主であり、卵を孵して成鳥となるまでのあいだ寄り添うことになる御方だ。

事前に耳に入っていた噂では、粗暴で気分屋、逆らう相手を斬って捨てる非情な性格だと語られていたけれど、実際に逢って見ないことには判断できないと思っていた。

誇張された大袈裟な噂なのだろうと、どちらかといえば楽観的な気分だったのだが、レイピアを投げつけられたことで緊張が高まる。

離宮の角を曲がり、銀色の鳥籠を胸に抱いて頭を下げた。

「翠蓮と申します。名誉ある、蒼鷺様の守護鳥の抱卵役を仰せつかりまして……」

「堅苦しい口上は不要だ。顔を上げろ」

「……はい」

挨拶を遮られた翠蓮は、うつむけていた顔を言われるがまま上げる。

でも、正面から顔を合わせるなど失敬なのは、と。蒼鷺の言葉に従うのが正解だったのかどうか迷って、視線を泳がせた。

「黒烏。おまえはもう、下がっていい」

翠蓮に目を向けることなく、無愛想な声でそう口にした蒼鷺は、翠蓮の隣に立つ黒烏を追い払う仕草で手を振った。

邪険に命じられた黒烏は、恭しく腰を折って応える。

「御意。では翠蓮、私はこれにて」

「あ、案内してくださり、ありがとうございました」

身体の向きを変えかけた黒烏にお礼を告げると、視線を合わせた翠蓮にかすかな笑みを浮かべ

て去って行った。

蒼鷺と翠蓮、翠蓮が抱えた銀の籠に鎮座する卵だけが、庭に残される。沈黙を気まじく感じる間もなく、蒼鷺が大きく足を踏み出して距離を詰めて来た。

「翠蓮か。銀の髪に、董の瞳……ふん、悪くない。歳は？」

「十八になりました」

「もうすぐ十九になる俺と、変わらないのか。そのわりに……」

言葉を濁した蒼鷺は、鳥籠を抱えた翠蓮の頭を大きな手で掴むようにして顔を仰向けさせると、まじまじと見詰めて来る。

きっと、小さいとか細身だとか、幼いと続けようとしたのだろう。似た年頃の同性から、その手の言葉を投げつけられることには慣れている。

変わらない年齢だという蒼鷺との体格の違いは、頭一つ分では済まない身長差からして歴然としている。ここまで差異があれば、羨みや劣等感さえ湧いて来ない。

顔を覗き込むように見下ろして来るせいで、否応もなく視線を絡ませることになり、翠蓮は息を吞んで蒼鷺を瞳に映した。

噂通りの、漆黒の髪は……どれほど鮮やかな色であろうと決して染められないと、意志の強さを示しているようだ。翠蓮を凝視する瞳は、これまでどんな高価な宝石でも見たことのない、深い蒼だった。

しばらく無言で翠蓮を見据えていた蒼鷺は、ふっと唇に微笑を浮かべる。

緻密に整った容貌のせいか、表情がなければ恐ろしく冷淡な冴え冴えとした空気を纏っていたのに、わずかな変化で途端に威圧感が和らぐ。

魅惑的な表情だと感じた直後、蒼鷺の口からは予期しない台詞が吐き出された。

「身なりからして、貴族だろう。しかも、その年と容姿で……未経験か？ 飽きるほど伸ばされただろう誘惑の手から、どのように逃れた？」

じわじわと頬に血が上ったのは、無遠慮な問いに対する憤りよりも、言い当てられたことへの羞恥だ。

王族の抱卵役は、心身共に清らかでなければならない。

その大前提は当然のことながら蒼鷺も知っているはずなのに、わざわざ翠蓮自身の口から語らせようとしている。

悪趣味なことを、と。

普段の翠蓮なら、不躰な手を払い除けて突っ撥ねる場面だ。けれど、蒼鷺が相手では身動きさえできない。

「ふーん、いいな。羞恥と苛立ちを必死で抑えようとしているが……気の強さを隠しきれていない、真っ直ぐな目だ」

なにが蒼鷺の琴線に触れたのか、なんとも楽しそうな目と声だ。

ただ、翠蓮の頭を鷺掴みにしている大きな手は、噂で聞いていたほど乱暴ではない。粗野なようであり、きちんと力を加減していることが伝わって来る。

「離宮へ案内しよう。ソレが孵化するまでのあいだ、おまえと俺は寝食を共にすることになるん

だ」

「……よろしくお願い申し上げます」

「堅苦しいのは好かん」

翠蓮の挨拶を一言で突っ撥ねると、先に立って歩き出す。

気配なく背後から近づいたというだけでレイピアを投げつけるほど、周囲を警戒している割に無防備な、と。

翠蓮の考えたことが伝わったかのような頃合いで、蒼鷺が振り返る。

「おまえが俺の寝首を搔く気なら、容易いな」

薄く笑みを浮かべて投げつけて来たその一言は、ただ思うままを口にしたのか……牽制なのか、今の翠蓮に読み取ることはできない。

黙殺するのは不敬であり、この場で返すことのできる言葉は、

「とんでもございません」

それだけだった。

ふんと鼻で笑われて正面に向き直った蒼鷺の態度からは、どう答えるのが正解だったのか推測することさえできなかつた。

気分屋で、乱暴で、気に入らない相手は容赦なく排除する。

そのように噂されている蒼鷺は、覚悟していたよりも大変そうだ。だからといって、翠蓮は「やはり無理です」と白旗を揚げることなど不可能だけれど。

翠蓮は、銀の鳥籠をギュッと抱くことで湧き上がる不安を抑え込む。

「あ……れ？」

そんな翠蓮の思いが伝わったかのように、白い卵がかすかに蒼く光ったように見えて、目をしばたたかせる。

見据えた卵には、特段の変化はない。でもまるで、気負いすぎないでと慰められたかのように感じて、肩の力を少しだけ抜いた。

蒼鷺に案内された離宮は、華やかな装飾が施されているわけであれば豪華絢爛な調度品もない、落ち着いた空間だった。

大きな窓に面して設置された寝椅子に腰かけた蒼鷺が、「そこに」と視線で翠蓮にも掛けるよう促す。

少し躊躇った翠蓮は、銀の鳥籠を抱えたまま寝椅子の端に腰を下ろした。

「おまえは、王族の守護鳥……抱卵役について、どの程度詳しく知っている？」

蒼鷺に問われた翠蓮は、スツと息を吸い込んで事前に頭に叩き込んである「守護鳥」と「抱卵役」に関する知識を述べた。

「守護鳥は、王族の方たちにとって大切な護り……御身のため、なくてはならない存在です。生誕時に手の中に握っていた『卵』は、抱卵役によって孵す以外になく、決定権は当の『卵』にあります。無事に孵化した雛の成長には、抱卵役の『涙』が不可欠です。羽が生え揃うまではそれ

以外のものから栄養を得ることはできず、抱卵役は守護鳥の孵化にも生育にも重要な存在であり……」

「もういい。通り一遍の知識は得ているようだな。いかにも育ちのよさそうな優等生で、……可愛げがない」

わざわざ翠蓮と視線を絡ませた蒼鷺は、目を細めて最後の一言を付け足す。

翠蓮の反応を見極めようとしていることがわかっていたから、表情を変えることなく短く答えた。

「申し訳ございません。ですが、抱卵役としてのお役目には支障がないはずですので」

「俺が、つまらねえって言ってんだよ」

翠蓮の言葉を遮った蒼鷺は、身を乗り出して来て翠蓮が膝に抱えている銀の鳥籠を取り上げる。

立ち上がり、寝椅子の脇にある台に鳥籠を引っ掛けると、座面に片膝を乗り上げて背の部分に右手をつき、翠蓮を見下ろしてきた。

真っ直ぐに見据えて来る深い蒼の瞳は、夜の帳が下りつつある空の色だ。

間もなく漆黒の夜が訪れる、その直前……わずかな瞬間の美しさを映すかのようで、魅入られたかのようになり目を逸らすことができない。

蒼鷺は、翠蓮が目を逸らさないことにかすかな笑みを浮かべて、口を開く。

「俺の目に怯まないとは、いい度胸だ。……その外見で、貴族の息子か。さぞ、周囲から持て囃されて来たんだろうな」

冷たく感じる蒼の瞳でジッと見下ろして来る蒼鷺の真意は、翠蓮には読み取ることができない。ただ、できる限り神経に障らないよう対応するのみだ。

無言は失敬だろうと、ぽつりと言葉を返す。

「……とんでもございません」

蒼鷺は、翠蓮の返答に眉根を寄せてチッと舌打ちをする。

機嫌を降下させたのはわかるが、先ほどの答えのなにが気に入らなかったのだろう？

実際に、翠蓮は自分の容姿が突出していると感じたことはない。

髪も瞳の色も、より彩り豊かで鮮やかなものを美しいとするこの国の首都で、少しだけ他者の目を引くらしいとは思うが。それが、得なのか損なのか……翠蓮自身には、どちらともいえない。

蒼鷺には、この容姿が気に障るのだろうか。

しかし、ついさっき庭で顔を合わせた際、銀の髪に菫の瞳は「悪くない」と言ってくれたはずだ。

どう接すれば蒼鷺の機嫌を損ねないのか、まったくわからない。

顔には出していないつもりだが、困惑する翠蓮に蒼鷺は小さく息をついて、寝椅子に乗り上げていた膝を下ろした。

ようやく蒼い瞳の束縛から逃れることができ、意識することなく強張っていたらしい肩から力を抜く。

「まあいい。重要なのは、ソレを無事に孵化させて育てることだ。名は、蒼樹という。翠蓮、おまえに任せた」

「御意」

卵の鎮座する鳥籠を掛けた銀の台に視線を遣り、「蒼樹」と教えられたばかりの名を心の中で繰り返す。

蒼鷺様の、守護鳥。蒼樹。

今はまだ想像するしかないけれど、卵が放つ光と同じ……美しい、蒼い羽に包まれた鳥に違いない。

絶対に、孵化させる。そして、立派な成鳥に育て上げてみせる。

翠蓮は決意を新たにして、両手を握り締めた。

それが、自分の役目なのだ。

失敗は、決して許されない。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>